

患者を薬漬けにする日本の病院

日本の医療現場において薬の使用は当たり前のものとなっています。では、薬を使用し続けるどのような問題が発生するでしょうか。

日本の国民医療費は2013年から増加し、2015年度の国民医療費は40兆円を超えてしました。これは、1人当たり約30万円の医療費がかかっている計算になります。

国防費の約8倍。

日本の医療現場で当たり前のものとなっている「クスリ服用」の増加は、日本人にとって良いことではありません。西洋の薬を飲み続けると副作用が必ず発生し、新たな病気を作ることになります。

ステロイドの恐ろしい副作用

ステロイドとは、体内にある副腎（両方の腎臓の上端に存在）から作られる副腎皮質ホルモンの1つです。薬として使用すると炎症を抑える作用があり、医療現場においてさまざまな疾患の治療に使われています。しかし、このステロイド剤の恐ろしさは抗ガン剤に匹敵します。

ステロイド剤を長期にわたり飲み続けると、強い副作用が発症しすぐ死にます。それはいったいなぜでしょうか。

ステロイド剤を外部より摂取することによって、身

体の中で副腎皮質ホルモンを産生している副腎皮質自身が「自分は働く必要がない」と認識してしまいます。やがて副腎皮質は働くくなり、紙のように薄くなってしまうため、副腎皮質ホルモンが分泌されなくなってしまいます。

その後、急に外部よりステロイド剤を摂取しなくなつた時、体の中の副腎皮質ホルモンが不足するため、倦怠感、吐き気、頭痛、血圧低下などの症状が見られることがあり、その後、左記のような強い副作用（症状）があらわされることがあります。

副腎皮質ホルモン剤の副作用

- ・ムーンフェイス
- ・白内障
- ・高脂血症、脂肪肝
- ・にきび
- ・水虫
- ・糖尿病
- ・骨粗鬆症
- ・胃潰瘍

免疫低下による易感染・脳症（精神障害）

症例【患者様：50歳男性】

彼は35歳くらいから喘息となり、病院にかかるようになりました。医師より処方された薬を毎日飲んでいたが、その薬の中のステロイド剤だけは絶対に飲まず捨てていました。彼の喘息は一進一退。病状はあまり良くならなかつたが、気管支拡張剤を使用して何とか生活ができるていた。

47歳の時に鶴見クリニックに受診。鶴見式水素を中心としたサプリメントの摂取と、食養生を行つたのち、わずか半年で完治した。

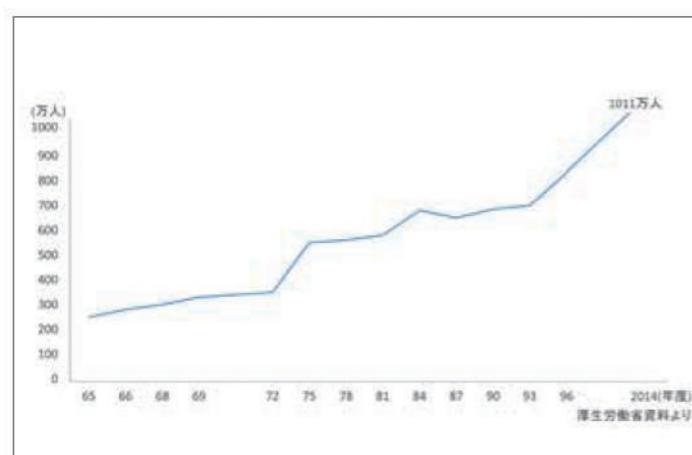
患者様の証言

「通院中、喘息友の会で知り合った8人の喘息患者とメールの交換をしていた。」「この8人は皆、ステロイドを服用していた。そしてこの5年で全員急死しました。皆40歳代であった。」

ある恐ろしい話

小児呼吸器科教授がある医師会にて、小児喘息患者のステロイド剤による治癒例を講演しました。終了後質問コーナーで、聴講者だったある医者は「この喘息児たちの余命はどの位だったのでしょうか？」という質問をこの教授にしました。

図1 昭和40年頃から高血圧になる人が増えている



その教授は『一番長生きしたお子さんは12歳で、平均余命は7歳でした。』と回答。会場はそのセリフの後、静まり返つたそうです。つまり、この子どもたちはすぐ死んでしまったということでした。

この小児呼吸器科教授が講演した「治った」という意味は、「死ぬまで喘息が発症しなかつた」ということです。これは治つたということにはなりません。死ぬまで喘息が出なかつたというだけで、患者は目先だけの治療で症状を抑えられ、死んでいったのです。これは、ある意味「殺人」ではないでしょうか？

ちなみに、この時の講演会スピーカーはステロイドホルモン剤の薬会社だったそうです。

薬が何故人体に悪いのか？

クスリは純粹な構造式で出来ているため、人間には異物となります。動物である我々は植物を摂取して生きています。人間が鉱物を摂取した場合、異物を身体の中に取り入れることになり、体内の恒常性が一気に乱れ、病気が発症します。クスリはこの無機的鉱物と全く同じ毒物です。そのため副作用、そして死亡事故が発症します。

もし鉱物を摂る場合には、一旦植物に取り入れられた鉱物（ミネラル）から摂取するべきです。

降圧剤の害

降圧剤を長期間服用し続けると、認知症の発症ります。

なぜこれほどに高血圧患者が増加したのでしょうか？その理由は、「高血圧の基準値が年々下げられて来た」という事実があげられます。1970年以前、収縮期血圧の数値は「年齢+90」が良いとされました。ところが1978年、WHOは160/95以上

を高血圧症と定義し発表しました。しかし、1999年にWHOとISH（国際高血圧学会）は140/90以上を高血圧と定義。20も下げました。日本はこれにならい、2000年に140/90以上を高血圧症と定めることにしました。この定義・数値変更により2000年の日本の高血圧患者は、718万6000人に急増したのです。

さらに2003年、日本高血圧学会は「60歳以上の人も60歳未満の基準で降圧剤を処方する」と処方基準を変更。さらに2008年には、いわゆる「メタボ健診」で130/85以上が高血圧者と定義されるようになりました。そのため2008年の高血圧患者数は、796万7000人にはね上がったのです。

その後日本高血圧学会は新たなガイドラインを発表し、2014年の高血圧患者数は1010万8000人にもなり、さらに高血圧症患者の数が増加しました。ところが、世界的に「血圧が高い=悪い」というならば、「即クスリ」という考えがかえつて恐ろしい結果を招くことがわかつてきたのです。では降圧剤を投与することによって、どのような副作用が出るのでしょうか？

「高血圧は薬で下げるな」という本を書いた浜田ハ郎医師は長年の研究や調査から次のように言っています。

1. 重症高血圧患者においてさえ、降圧剤で血圧を下げることによって寿命が延びたといえる確実なデータは日本でも海外でもない。

